

有斐閣ストウディア
安藤至大 (2021) 『ミクロ経済学の第一歩 新版』
確認・練習問題の解答例

2021年5月13日版

目次

第1章	ミクロ経済学とは？	2
第2章	個人の選択を考える	6

第 1 章

ミクロ経済学とは？

確認問題

問題 1.1. 他人には価値が低くても自分にとっては価値が高い財・サービスの具体例を探してみましょう。

小さい頃に描いた絵や友人からもらった手紙などを考えてみてください。これらは自分にとってはとても価値がありますが、おそらく他人にとっては価値がないか価値がとても低い財であると考えられます。

問題 1.2. あなたの身の回りに相場の価格が決まっている財・サービスはありますか？ できるだけ多く見つけてください。

相場の価格で取引がされている財・サービスの例として、スーパーで売られている野菜や果物、またヘアサロンでのカットやパーマがあります。
野菜などの場合には、特別な産地で作られたものなどを除くと、近くの店同士であればだいたい同じ価格で売られていますし、ヘアサロンのサービスもおおよそ相場の価格帯が存在しているからです。

問題 1.3. Amazon.com などのネット通販サイトで販売されているさまざまな商品について、自分の支払意思額を具体的な数字として考えてください。また、これまでに購入した商品について、いくらまでなら支払うつもりがあったのかも考えてみましょう。

いま Amazon.co.jp の売れ筋ランキングを見ると、ホーム&キッチンのランキング 1 位はポット型浄水器のカートリッジでした。私はこの浄水器の本体を持っていないので、無料であっても要りません。よって支払意思額はゼロです。

ランキングの 2 位は電子体温計です。私の自宅にはすでに体温計があるので、これも不要です。ただいま使っている体温計はかなり前に購入したもので、1000 円以下なら買い換えても良いと考えました。したがって支払意思額は 1000 円です。

ランキングの 3 位は、ホテル仕様のバスタオル 2 枚セットでした。これは 2000 円までなら買いたいと感じるので、支払意思額は 2000 円となります。

これまでに購入した商品を確認するために注文履歴を見えます。私が 2021 年に入って最初に購入したものは、Amazon Essentials のメンズスウェットシャツ（ネイビー）でした。これは税込価格で 1736 円でしたが、商品のページの写真とカスタマーレビューを見て「安い！」と感じて購入したものです。「これならば 2500 円、いや 3000 円でも買うなあ。でも 3000 円を超えたら、さすがに高いな」とそのとき感じたので、支払意思額は 3000 円です。

練習問題

問題 1.4. ここでは貨幣を用いた交換ではなく物々交換について考えてみましょう。登場人物は安藤さんと井上さんで、安藤さんは読み終えた文庫本を 1 冊、井上さんは新鮮なミカンをも 1 個持っているとして。

このとき安藤さんと井上さんの間で合意に基づく物々交換が成立するためには、文庫本とミカンに対する二人の価値にどのような関係が成立していなければならないのでしょうか？ 説明しなさい。

安藤さんにとって、文庫本の価値よりもミカンの価値のほうが高いこと、また井上さんにとって、ミカンの価値よりも文庫本の価値のほうが高いことという二つの条件が必要です。

(別の回答)

まず文庫本を B 、ミカンをも M と書くことにします。また安藤さんにとっての財 x の価値を $v_A(x)$ 、また井上さんにとっての財 x の価値を $v_I(x)$ と書くことにします。このとき物々交換が成立するための条件とは、 $v_A(B) \leq v_A(M)$ と $v_I(B) \geq v_I(M)$ という二つの不等式が成り立っていることです。

問題 1.5. あるコンサートのチケットが定価の 5000 円で販売されているとしましょう。このチケットの売り手を A 社とします。またコンサートの開催費用を席数で割った金額、つまりチケット 1 枚あたりの原価を 2000 円とします。現実のコンサートでは、S 席や A 席など、会場内の場所によりチケットの価格は変わりますが、ここでは話を簡単にするために、すべての席は同じ条件だとします。

そしてこのチケットを購入した B さんは、自分で音楽を聴きに行こうかとも思いましたが、ネッ

トオークションで高く売れるのであれば売ってもよいと考えて、実際に出品してみました。するとこの出品を見た C 三が入札に参加して 8000 円で落札し、チケットが転売されたとします。

この状況を前提として、次の質問に答えなさい。なおネットオークション会社に支払う手数料や郵送料等はゼロとします。

(1) A 社と B さんと C さんが得た余剰 (= 交換から得た利益) は、それぞれどの程度の大きさでしようか？

(2) 転売することが違法行為だとして禁止されていたとしましょう。このとき登場する三者の余剰は、それぞれどのように変化するでしょうか？

(3) チケットを転売目的で購入し、会場付近等で転売して利益を上げる行為はダフ屋行為と呼ばれ、条例等で規制されています。なぜ個人がネットオークション等で不要になったチケットを転売することは許されているのにダフ屋行為は禁止されているのでしょうか？理由を考えて説明しなさい。

(1) A 社が得た余剰は 3000 円、B さんも 3000 円、C さんがコンサートを聞きに行くことから得た満足度の大きさが x 円相当だとすると、C さんは $x - 8000$ 円となります。

なお実現する総余剰の大きさは、全員分の余剰を合計すると $3000 + 3000 + x - 8000 = x - 2000$ となります。これは実際にコンサートを聞きに行くことから実現する価 (x 円) から原価である 2000 円を引いたものになっています。

(2) A 社が得る余剰は 3000 円、B さんがコンサートを聞きに行くことから得られる満足度を y 円相当だとすると、B さんの余剰は $y - 5000$ 円、取引に参加していない C さんはゼロになります。

この場合に実現する総余剰は、 $3000 + y - 5000 + 0 = y - 2000$ となります。ここで B さんはコンサートに自分で行くことよりもチケットを 8000 円で転売することを選んでいて、 $y \leq 8000$ が成立しています。また C さんは、チケットを 8000 円で手に入れていることから $x \geq 8000$ が成立しています。この二つから $x \geq y$ が言えるので、転売できないことによって総余剰が $x - y$ だけ減少してしまっただけがわかります。

(3) ダフ屋行為は、反社会的な団体などの収入源となる可能性があるため、それを禁止することで交換の利益を損なうことがあったとしても、政策的に禁止することのメリットのほうが大きいのだと考えることができます。

問題 1.6. 国道の拡幅工事をするにあたり、道路沿いの住宅にすむ山口さんに立ち退いてもらうことになりました。この住宅と土地の持ち主である山口さんに対して、国はどの程度の補償金を支払えばよいのでしょうか？

行政の担当者は「その近辺の土地と建物がどの程度の価格で取引されているのかを調べて、同程度の金額を支払えばよい」と考えているようですが、山口さんは「それでは不十分だ」と不満そうです。なぜこのような考え方の違いが生まれるのでしょうか？価格と価値の違いに注意して理

由を説明しなさい。

山口さんが所有する不動産と比較して同程度の物件が仮に 5000 万円で売買されていた実績があるとします。そして山口さんにも同程度の価格で不動産を売却するチャンスがあったかもしれないのに、今でもその家に住み続けていることから、山口さんにとって現在の物件に住み続けることの価値は同程度の物件の取引価格である 5000 万円を上回っていると考えられます。これを x 万円としましょう。

したがって、立ち退きの補償金として類似物件の取引価格である 5000 万円が支払われるだけでは、山口さんにとっての価値である x 万円を下回るため、山口さんは不満を感じることにあります。

(補足説明 1)

土地や建物だけでなく、中古品の取引が行われている財は自動車やスマートフォンなどたくさんあります。この教科書などの書籍もそうですね。このような財については、現在それを所有している人にとっては中古品市場で売却するよりも自分で使い続けることの価値が高いからこそ所有し続けているのです。

(補足説明 2)

なお道路の拡幅など公共用地の取得が必要になり、現在の所有者に対して土地や建物からの立ち退きを求める際には、実務上は昭和 37 年 6 月 29 日に閣議決定された「公共用地の取得に伴う損失補償基準要項」に基づき類似物件の取引価格を基準として算定されています。詳しくは <https://www.mlit.go.jp/common/001338602.pdf> を見てください。

ここで説明したように類似物件の取引価格では補償金の水準として不十分なのですが、なぜこのような不十分なやり方が行われているのでしょうか。それは現在の所有者にとっての価値である x 万円の大きさがどの程度なのか行政側にわからないからです (このように現在の所有者という取引当事者のうち片方が知っていて、もう片方の行政が知らないような状態を指して情報の非対称性といいます。詳しくは本書の第 10 章で学びます)。

だからと言って現在の土地所有者が要求する金額をそのまま支払うわけにはいきません。補償金の原資は税金ですので、適切な支出をすることが求められます。そこで算定方法としては不十分であったとしても、一定の割り切りの下で類似物件を参考にする計算方法が用いられていると考えられます。

第2章

個人の選択を考える

確認問題

問題 2.1. あなたにとって大学で勉強することのインセンティブとは何でしょうか？ 金銭的なものだけでなく非金銭的なものも含めて考えてみましょう。

大学を卒業することにより、働きだしてから得られる生涯賃金が増加することは、大学で勉強することのインセンティブとして働くことが考えられます。これは金銭的なインセンティブです。

具体的な数字を見てみましょう。厚生労働省の「賃金構造基本統計調査」における2018年のデータを見ると、高校卒の男性の生涯賃金は2億1370万円であり、女性の場合には1億5200万円ですが、大学・大学院卒の場合には男性は2億7210万円で女性は2億1570万円となっています。このように大学や大学院を卒業することにより生涯賃金は男性でも女性でもおよそ6000万円増加することになります。

なおここで挙げた数字は、平均的な回数の転職はするものの失業期間はないケースであり、退職金や61歳以降の賃金は含まれません。

次に非金銭的なインセンティブとしては、一生の付き合いになる友人が得られることや学問に打ち込むこと自体から得られる達成感などがあるかもしれません。

問題 2.2. トレードオフには、一定の資源を今使うのか、それとも残しておいて後で使うのかというパターンもあります。具体的な例を考えてみてください。

アルバイトで得たお金を今使うのではなく、大学を卒業する際の卒業旅行で使うために銀行に預金している学生がいたとします。このときこの人はお金という資源を残しておいて後で使うことを選択しています。

問題 2.3. ある高校生が、高卒で就職するか大学に進学するかという意思決定に直面しているとします。それでは大学に進学することの機会費用とは何でしょうか？ 見えない費用にも注意して考

えてみましょう。

高校から大学に18歳で進学し、22歳で卒業して働き出すことを考えます。このとき高卒で働いた場合と比較して、金銭的な支出として追加的に支払う必要があるのは4年間の学費や交通費、教科書代などです。

しかし機会費用には、このような金銭的な支出だけではなく、他の選択肢を選んでいたら得られたはずのものが得られなくなったことを考慮する必要があります。具体的には高卒で4年間働いていたら得られた収入や経験です。これらをすべて合計したものが大学進学の場合の機会費用になります。

練習問題

問題 2.4. インセンティブについて説明する際に歩合給の例を使いました。実は、トレードオフ・機会費用・限界的という他の三つのキーワードもこの例だけで説明できます。なぜなら「四つのキーワード」は、人々の意思決定を考える際に、常につきまとうものだからです。

図2.2を使って、四つのキーワードを説明してみましょう。

【トレードオフ】 より多くの収入を得たいということ、できるだけ楽なように少ない時間だけ働きたいという二つのことは、図2.2のような歩合給のもとでは両立することができず、トレードオフの関係があります。

【機会費用】 図2.2では、努力水準について右上がりであり、また努力水準が増えると通増する形のグラフが労働の費用として描かれています。そして努力水準が上昇したとしても金銭的な支出があるわけではありませんが、労働時間が増えればその間は他のことができないことから、ここでいう労働の費用とは、努力水準を高めることにより失ったものを意味する機会費用であるといえます。

【限界的】 図2.2を見ると、努力水準として y を選択することが最も望ましい選択だという説明がされていますが、この水準よりも少し努力水準を増やしても少し減らしても満足度が減少することが見て取れます。これはある状態に注目して「そこから少しだけ増やしたり減らしたりしたときにどうなるか」を見て最善な選択を考えているという意味で、この労働者は限界的に考えているということがわかります。

問題 2.5. 私が1枚の1000円札をあなたに見せて、「これを黙って受け取るかそれともいらないと拒否するか選びなさい」といったとしましょう。このときあなたが直面している選択肢は、受け取るか受け取らないかの二つになります。

ここで受け取る場合の収入は1000円で機会費用はゼロなので超過利潤は1000円となり、受け取らない場合の収入はゼロで機会費用は1000円なので超過利潤は-1000円となります。このと

きは受け取った方が良いですね。

それでは、私があなたに2枚の1000円札を見せて「私が右手に持っている1000円札と左手に持っている1000円札のどちらかを差し上げます。どちらかを選んでください」といったとしましょう。このケースについて次の問いに答えなさい。

(1) 右手の1000円札という選択肢を選ぶ場合について、収入と機会費用の大きさを説明しなさい。

(2) 1000円札が1枚のケースと2枚のケースとでは、皆さんは結果として同じく1000円を手に入れることができるのに、なぜ経済的な費用や利益は違う数字になるのでしょうか。理由を説明しなさい。

(1) 右手の1000円札を選ぶ場合の収入は1000円であり、その機会費用も1000円となります。

(2) 1000円札が1枚で、これを受け取るか拒否するかという選択の場合には、二つの選択肢の間の価値が異なるのに対して、1000円札が2枚の場合には、どちらを選ぶという選択をしても価値が同じことから、「何が最善の選択なのか」を考えるために用いる概念である経済的な費用や利益の大きさが変わっているのです。